

## ロドリゴ・ガメス博士と JICA

皆さん [INBio \(インビオ\)](#) という機関を聞いたことがあるでしょうか？ 日本語にする  
と生物多様性国家研究所、とでも訳せるのですが、生物多様性保全分野でコスタリカの名  
を世界にとどろかせるのに一役買ったのがこの INBio という機関です。

悲しいことにこの INBio も実質的な活動は 2015 年に終了してしまっただけですが、それ  
でもその功績は色あせることはありません。この INBio は JICA とも少なからずつなが  
りを持っていたのですが、そのつながりは INBio の創設者であるロドリゴ・ガメス  
(Rodrigo Gámez Lobo) 博士の存在が大きかったのです。そのガメス博士が 2025 年 3 月  
1 日に 88 年にわたる生涯に幕を閉じるという悲しい知らせが入ってきました。

そこで本稿では、ガメス博士のご冥福をお祈りしつつ、コスタリカにおける過去の協力の  
歴史を残すとという意味から、ガメス博士と JICA の思い出を記したいと思います。

ガメス博士と JICA のつながりは、コスタリカにおける JICA の最初の技術協力プロジェ  
クトである「コスタリカ大学電子顕微鏡センター創設」プロジェクトから始まります。  
JICA が当国で実施した最初の技術協力プロジェクトのカウンターパートの一人がガメ  
ス博士でした。

紆余曲折あったのち、ガメス博士はコスタリカ大学を辞められ、INBio の設立の主人公  
として大きな貢献をされております。INBio の設立とその後の活躍が、コスタリカの名  
前を生物多様性保全の分野で国際的に有名にした要因の一つであることを考えると、ガ  
メス博士の功績はとても大きいと思います。

INBio と日本の間では、1993 年～1997 年まで城殿博さんが JICA の長期専門家として派  
遣されていたこと<sup>1</sup>、その時期に日本財団の寄付を得ていること、秋篠宮殿下が訪問し  
植樹されたこと（その樹は今でも元気に育っています）、また、JICA 地球環境部の当  
時の江島部長と池田次長の推薦で 2014 年に旭日硝子財団の [Blue Planet Prize](#) を受賞し  
たこと、それを受けてインドのハイデラバードで行われた生物多様性条約の COP11  
で、JICA とコスタリカ政府と共同でサイドイベントを行ったことなど、少なくない関  
係もあり、ガメスさんも折に触れて JICA のことを気にかけてくれました。

---

<sup>1</sup> [https://nipponjungle.blogspot.com/2009/04/blog-post\\_26.html](https://nipponjungle.blogspot.com/2009/04/blog-post_26.html)

昨年の [JICA コスタリカ協力 50 周年記念式典](#) にもご招待をし、ご出席の返事を伺っていたのですが、直前で体調を崩されご出席ができませんでした。私も 2014 年の旭硝子財団の受賞を機として知り合うことができ、社会的地位や功績に関しては足元にも及ばないような私にさえも、会うたびに本当に優しく接していただいた記憶があり、そのお人柄がうかがえました。50 周年式典で会えることを本当に楽しみにしていたのですが、お会いできず、その後あらためてお会いしたいと機会をうかがっていたのですがかなわず、とても悲しい気持ちです。

今回の記事を書くにあたり、ガメス博士のご長男であるルイス・ガメスさんに連絡を取りましたところ、「JICA のホームページにおいて追悼記事を載せてもらえることは、家族全てにとって光栄なことです。

JICA の皆さんが私たちの父のことを思い出してくれること、また、研究、科学、保全においてとても重要であったコスタリカ大学と INBio への支援をしてくれたことに大変感謝します。父ロドリゴは、他人への尊重、秩序・規律、約束を守る・やり通す、といった国や個人として進歩してくために重要なものを持っている日本の文化と日本をいつも尊敬しておりました」というメッセージをいただきました。

最後になりますが、コスタリカにおける最初の JICA 事業の専門家であり、ガメス博士をカウンターパートとして活動された [小塚芳道博士](#) より追悼文をいただきましたので、ご紹介させていただきます。

### Dr, Rodrigo Gamez Robo を偲ぶ

小塚芳道

確か昨年（2024 年）の 12 月の早い時期だった、しばらく何も連絡がなかった Rodrigo から「回復はゆっくりだが少しずつ良い方向に向いているがまだ不自由な事が多い。なにをするにも時間が掛かりもどかしいが、早くもう少し動けるようにしたいと思っている。Yoshi（への返信）メールは早いからちいさなことで近況をしらせてくれ。」こんな内容のメールを受信したのが昨日のようにおもいだされます。年齢的にそれほど違いがあるはずはない、正確に何年生まれと言う話はコスタリカでも帰国後も話したことは無いのです。年齢は同じくらいと思っていたのですが恐らく僕より一年後くらいだったのでしょう。年齢を気にする間柄ではなくても話は半分聞けば大体その先は見当がつくほどの近さで、あたかも兄弟のような関係だったとおもいます。

最後にあったのは電子顕微鏡設立 30 年記念だったと思いますが、招待されて電子顕微鏡センターの記念行事に参加した折に話す機会があり、僕が定宿としてコスタリカ大学本部に近いアパートホテルタイローナのロビーでコーヒーを飲みながら 「Yoshi 頭が薄くなったほかはあまり変わっていないな。」 「お前だって頭は確実に薄くなっているじゃないか。」 と言って話が始まるのが一種の挨拶になっている間柄で、それは二人の間にわだかまりが無い事を示すのだろうとおもいます。僕にとって数少ない何でも言える、聞ける間柄でした。不謹慎な言い方かもしれませんがさっさとこの世から消える方が良い人もいる社会の中で、これ程何でも言える、聞ける間柄はそう多くないと思います。

これがあったために今回のコスタリカに対するプロ技、第三国研修<sup>2</sup>がスムーズに行われる基礎を作る事が出来たのだろうと思います。Gamez の話ではコスタリカからアメリカの Perdue 大学で植物病理学を修め、特に科本科のウイルスに関しての知識に関しては深く、学位取得後はコスタリカ大学の農学部に戻り、後に初代の研究科担当副学長をしていたことがあり、任期終了後は農学部で教鞭をとり、合わせて新しい研究室を開設する準備をしていたと聞きました。

Gamez が電子顕微鏡センター（旧名 Unidad de Microscopia Electronica. UME）にあった実験動物舎の建物を新たに作る分子生物学研究センター CIBCM ( Centro de Investigacion en Biologia Celuoar y Molecular ) の改収中でした。阪大微生物研究所所長深井幸之助教授は、機材選定の折に Dr. Gamez がウイルス学者でもある事、丁度サンホセ小児下痢症の原因ウイルスのロタウイルスがあることをご存じで、ウイルスの分離に必要な器材を中に加えてあり、分析の研究室としてすぐに作業が出来るように配置されていました。

Dr. Gamez も自身がアメリカから帰国時に使用中であった装置を別の部屋に置いてありました。未完の部分は研究者の個室、講義室、事務室等で改修はかなり進んでいました。

色々な問題はあったものの研究は順調に進み Dr. Gamez を中心とするグループはコスタリカのウイルス学に大きな貢献があったことは、いうまでもありません。

---

<sup>2</sup> コスタリカ大学電子顕微鏡センター創設プロジェクトとその後に実施された第三国研修を指す。

<https://openjicareport.jica.go.jp/pdf/10201804.pdf>

<https://openjicareport.jica.go.jp/pdf/11100906.pdf>

ある日僕は Dr. Gamez と一緒に、新しく計画されているサンホセからプンタレナスまでの新たな道路建設予定地を観に行きました。人の手が入っていない熱帯林、そこにある植物、動物は恐らく確実に変わってしまうだろう。

帰り道で僕は「このような工事に必要なほかの道路を改修する方法は無いのかい？」「熱帯林、そこに住む動物、昆虫、寄生植物等が失うことにならない方法は無いのかい。」と問うた。

しばらく後 Dr. Gamez がぽつんと「何とかしないと、悪い前例を作る事になるだろうな。」と言った。

この話はどのくらい時間が経過したかはおもいだせませんが、ある日「新しい研究施設を作ることにしてエレディアのコーヒー園の一部を、予算を取って買い取るようになった。ここに自然保護とコスタリカの生物のカタログ、医療用に活用できるものに関しては分析と電顕による解析も必要になるけれど、人材養成とかが必要な場合協力できるか？」と、問われた。

僕は「これはコスタリカのプロジェクトのため僕の立場からは直接的な協力の範囲は限られるが出来るだけ協力するから、さしあたり電顕の技術者を確保しよう」と第三国研修をしていない半年を、新しくできた研究施設 INBIO ( Instituto Nacional de Biodiversidad ) が活動を始め、天然物の研究、コスタリカ国内に生息する動物、植物等の分類カタログ、生態地図などの作成に貢献した。

その後、僕が電子顕微鏡センター設立確か 30 年記念行事の折にコスタリカ大学を訪れ、INBIO で会った時に、経済的に苦しい状態である事を話し、今は INBIO から退いたと話していたよね、何も出来なかった事を話すと、これは誰が所長であっても同じだっただろうと話していた。

東京の青山大学で自然保護の国際会議に一人娘の Cyntia を連れてきたことがあったね、一緒にあちこち歩いた日本の研究施設を回ったことをおもいだすね、もう一度コスタリカに帰って来いよと言っていたが果たせなかったことを今悔やんでいる。

JICA がコスタリカに初めて行った電子顕微鏡センターが今も活動しているのは最初の例ときいている。僕はこのプロジェクトは一人歩きが出来るまで成長しこれからずっと継続するだろう、Rodrigo Gamets の名前はわすられる事は無いだろう。またどこかで会おう最も尊敬する研究者として僕は Rodrigo の名前は忘れない。Yoshi.

写真:ありし日の Rodrigo G3mez 博士 (Luis G3mez 氏提供)



植樹をするガメス博士 (右側の男性)



若かりし日のガメス博士。(一番右の男性)



## 関連ページ

[コスタリカにおける国際協力50周年記念 インタビュー 小塚芳道さん | 海外での取り組み - JICA](#)

[コスタリカ大学電子顕微鏡センター創立・JICA 協力50周年記念式典 でのご挨拶（仮訳）](#)

[コスタリカ大学電子顕微鏡センターホームページ](#)

[ジャンゼン教授・INBio : 3. 科学者たちの情熱 - 公益財団法人 旭硝子財団](#)